

## 〈特集〉

# プロジェクト現場での郷愁

佐々木 博 康<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>水ingエンジニアリング(株) 調達統括  
(〒108-0075 東京都港区港南1-7-18 E-mail: hiroyasu.sasaki@swing-w.com)

### 概要

筆者は1988年に入社した2年目から技術者として海外関連の業務を担当し、1999年から2015年までの間は、水処理エンジニアとしてシンガポールとベトナムに赴任していました。これまで担当したODAプロジェクトや民間客先向けの水処理設備建設における、プロジェクトや現地での実生活を通して得られた経験を紹介致します。これから海外でのビジネスのみならず、隣近所の外国人の方と御付き合いの機会もある、特に若い方々にとって少しでも参考になれば幸いです。

キーワード：海外、プロジェクト、ODA、水処理  
原稿受付 2019.5.8

EICA: 24(1) 24-27

## 1. 筆者の略歴と本稿の紹介

この原稿を書いている5月に令和の時代となりましたが、平成の時代が始まった30年前には、日本社会にこれほど海外からの人材の力が必要な時代が来るとは予想もしませんでした。

私が荏原製作所に入社したのは1988年、それから何度かの会社組織の変遷がありましたが、現在の水ingエンジニアリング(株)に至るまで、社歴の大半において海外の水関連プロジェクトの業務を担当してきました。

ここでは大所高所から国際協調、各国の外交戦略や企業のグローバルビジネスの動向などを俯瞰的に述べる方向ではなく、いわゆるコントラクターの一技術者として海外での水関連のODAプロジェクトや民間水処理設備建設の現場で経験してきたことを紹介していきたいと思います。

私の入社翌年の1989年に日本のODA援助額が世界1位となり、それから10年の間は、日本は1990年を除いて援助額首位、世界最大の援助国の時代でした。当時私は大型ポンプ場のシステム設計のエンジニアとして海外プロジェクトの経験をスタートし、その後は水処理設備の設計エンジニアとして1999年よりシンガポールで2年間、ベトナムのハノイで13年間、両国の子会社へ出向、現地での業務に関わりました。

では以下、約30年前のプロジェクトの事から紹介していきたいと思います。

## 2. 海外プロジェクト現場で経験

私が初めて長期で現場に入った国はインドネシアで、ジャカルタ近郊のプカシ市のJICA無償援助案件で、水道衛生訓練センター建設の現場でした。私はポンプの実習訓練設備の設計を担当し、現場には試運転及び客先トレーニング担当の技術指導員(スーパーバイザー)として入りました。1990年当時は、既に日系の建設会社も多く進出しており、ジャカルタは高層ビルの建設が盛んになりながらも、市の中心部でもベチャと呼ばれる人力車が走る、のんびりした雰囲気の中に活気が湧き上がる不思議な街でした。このプロジェクトでは完工の時期とイスラム教のラマダン、断食月が重なり、工事の追い込み時期に作業進捗が落ちて苦労した記憶があります。現地スタッフはいつもよりの早起きと日中の時間の断食のため、特に暑い屋外での作業が捗らず、幸いなんとか工期に間に合ったものの、現地の文化を理解しての対応と協調の重要性を感じました。

この現場では首都ジャカルタが建設ラッシュ時期でもあったため、私達のプロジェクトでも一般工事資材の入手にそれほど不自由は感じませんでした。その後数年の間に経験したバングラデシュ、ニジェール、セネガルの現場はそれとは全く異なる印象になりました。プロジェクト用に輸入したもの以外で、現地調達で利用できる資機材は非常に限られました。あらかじめ現地状況を考慮してニジェールの現場では工事量は少なかったのですが、一般工具から配管のねじ切り機まで持ち込む対応をとりました。しかしバングラデシュのダッカのプロジェクトでは港で通関待ちだった

貨物にかなりの量の盗難被害が発生し、同等の材料を求めて市内の資材市場を随分調査しましたが、仕様の合うものはほとんどありませんでした。保険による盗難品の補償はうけられたものの、再手配・輸入が必要となり、機器据付工事工程が圧迫され、非常に厳しい工事となりました。

いくつかの経験を経た今は、不測の事態も考慮し、現地での機器や資材の入手性や規格、地元工事会社の力量の情報の事前把握を心がけるようにしています。

特にアフリカ諸国でのプロジェクトでは、JIS や JEM などの規格はもちろん日本自体の認知度までも低く、機器メーカーの選定やプロジェクト完工後の予備品の入手ルートの確保など、継続的な設備運用にはアジア域より丁寧な配慮の重要性を実感しました。

### 3. 今改めて考えること

#### 3.1 国は違えども

このように日本との気候、民族、言語、文化、流通する物資、工事業者の実力の違いなどを痛感しながらプロジェクトを進めてゆき、最後に試運転で機器が動き、水処理プロセスが設計通りの性能を発揮すると、大げさですが遠い異国で、同じ普遍の真理に到達し、現地の人々と共有できたよううれしさを感じました。

普遍性という意味では、国や政治体制、宗教が異なっても人のタイプと社会の評価には、相似性のようなものを感じます。規則に堅くて融通の効かない人、ビジネスのポイントに鋭い人、決断する度量のある人、批評に偏りがちな人。いずれの国でも同じように人の型のバリエーションがあり、プロジェクト実施の場で信頼され、頼りにされる人のタイプも国を超えて同じ匂いのする人物であることに面白さを感じます。また仕事の遂行能力とは別に、厳しい状況でもユーモアを持てる人の存在の重要性、家族に対する愛情も、国は違えども人の本質は変わらないと思わせるところです。

ところが根本は同じとはいいながら日本人はかなり仕事についての取り決めや期日の遵守、品質管理に厳格で、プロジェクト現地国の客先やパートナー、現地業者との間で考え方や認識の違いに起因する意見の衝突はよく直面する場面です。

しかし多くの場合プロジェクトが進み、関わりが深くなるにつれ、同じような考えや制約のある中で動いている相互の立場を汲むことができるようになると理解が深まっていき、信頼関係が醸成されていきます。

私は15年海外駐在を経験しましたが、まだお互い理解の浅い個人や会社間の橋渡しをすることは、その地と人を知る駐在者の重要な仕事と今は思います。

#### 3.2 何が残るか

「財を残すは下、仕事を残すは中、人を残すは上」という言葉を折々聞きます。入社後に海外案件に関わるようになったばかりのころの20代の私は、経験もなく心細い環境下で、ともかく目の前の仕事をなんとか終えることしか頭になく、自身が現場で得られる経験の意味や一緒に働く現地の人達に何を残せるかは全く考えられませんでした。当時は海外駐在やプロジェクトでの短期出張でも、海外で業務を行っている方は中堅以上の方がほとんどで、日本人の役割としては、指導的な立場が主であったと記憶しています。それに対して最近では各企業でも、将来を考えて入社2~3年の柔軟性と吸収力にあふれた若手の時に一度海外赴任させるケースをよく見聞きするようになりました。また各個人でも、最初の就職先として海外で働くことを選ぶ方も珍しくなくなっています。日本の企業も海外での活動を拡げ、雇用や働き方のバリエーションが広がってきた流れの一環かと思います。これまで援助を行ってきた国に対しても、今後はODAのようなプロジェクトでも個人の活動でも、私達日本人が資金や技術を提供・指導する立場から、より対等で継続的なパートナー的立場で共生していく形になっていくのではないかと感じます。

#### 3.3 日系コントラクターの役割

私の関わったODA水関連の案件は無償援助(グラント)と円借款(ローン)の両方の案件がありましたが、円借款の案件は返済条件が緩やかであっても援助対象国の資金負担で行うプロジェクトで、相手国の最終客先の意向が強く感じられます。費用と機能のバランスや、引渡し後の維持管理のコスト低減や運転のしやすさなどのリクエストの細かさに、現地国のお金でプロジェクトを実施する厳しさを感じました。

また私はベトナム駐在中、ODAプロジェクト以外に民間企業の客先からの工場建設に伴う水処理設備建設案件も、設計やプロジェクトマネージャーの立場で取り組みました。

日系はじめ各国からの外資系進出企業の多くは生産コストの低減を目指して現地ベトナムに進出してきており、当然私達の関わる水処理設備についても同様にコスト低減が求められます。その一方で日本国内同等の品質要求に応えることも期待され、そのバランスの実現が私達のような日系コントラクターのテーマと感じていました。

また地元資本の企業が客先の場合は、同じ設備を売り込む地元の競合会社と比較されることで更にコスト評価が厳しく、設計の相違や品質、性能保証に価値を認めてもらうことに苦労しました。(結局多くの場合コストが高いという判断で採用されませんでした)

現地駐在の立場の時は目の前の仕事の受注や実施に夢中でしたが、ベトナムのように中興国となり更に成長を続ける国での次の時代の日本のエンジニアリング会社、コントラクターの役割のイメージをしっかりと持つことは今後企業にも個人にとっても生き残りに不可欠なことと思います。

#### 4. 現場の憂愁

いずれかの現場にある程度長い期間滞在すると、短期の出張や旅行ではなかなか見られない風景を目にすることがあり、それらは今でも印象深く思い出されます。時にその断片が手元に残ることがあり、そんな古い写真をいくつか紹介させていただきます。



Photo. 1 Children in Niger Solar Pump site

最初の写真はニジェールでの一枚で、現場でソーラーポンプ設備の据付に働く現地の人々に、油で揚げた小魚を毎日売りに来ていた幼い姉と弟です。近くには集落も見当たらないのに40℃以上になる現場にどれだけ遠くから歩いてきているのか、不思議に思っていました。魚を売り終え、強い陽射しを避けて木陰で一休みしている影絵のように見えた二人の姿に、不思議な郷愁を感じたことを鮮明に覚えています。

Photo. 2 はハノイの下水処理場の現場で汚泥脱水



Photo. 2 Sunset in Hanoi, Vietnam

機を試運転しながら見た夕日です。条件を変えながら朝から運転を行っていて雨上がりの息を飲む眺めに会いました。



Photo. 3 Volta River side in Ghana

Photo. 3 はガーナのボルタ川の渡し場で、故障したフェリーを待っている時に会った洗濯中の女性たちです。未給水地域の水道整備計画の調査の時でした。写真ではその時の雰囲気何分の一も伝わりませんが、見た事のないはずの初めての場所の風景に、記憶のどこかが共鳴する覚えました。

またそれぞれの地で朝の目覚めの時に聞こえてくる音、イスラム寺院の礼拝を呼びかけるアザーン、各地域で様々に異なる鶏の声、市場やバイクの音、宿の発電機が起動する音、そんな明け方の時間に耳やかましく聞えた音たちも、遠く離れた今は貴重な思いでの一片になっています。

現場では雰囲気を楽しむような、のどかな事ばかりではなく、起工式前のプロジェクト建設予定地の周りに突然新しい家や並木が現れたり、急な法律改正、埋設した電気ケーブルが一夜で盗掘にあったりと、驚愕することも多くありました。そんな時にはもちろん対応で右往左往になりますが、今、時を経て思い出すと、プロジェクトも自分達も生き生きと動いていた1ページだったと感じます。

#### 5. 人々の思い出

東日本大震災の時には私はハノイに駐在中で、震災後にそこで忘れがたい経験をしました。出会う人毎に日本の家族の安否を尋ねられ、街では様々な場で募金活動が行われました。私の妻も日本大使館へ出向いた際に、生徒たちからのメッセージを持ってきた現地の学校の先生や、寄付金を持ち寄った多くのベトナムの方々とも会いました。また私はコントラクター泣かせの辛口コメントの多い客先の副ダイレクターから会議前に握手を求められ、被災地で水や支援物資を受け取るために並ぶ人々の秩序と自制心に非常に感銘を受け

たという話を聞かせてもらいました。

震災後には我々海外在住の日本人ができる支援は限られ、苦勞を分かち合うこともできず、もどかしい思いをしていた時期でしたが、日本人を気遣い、励ましてくれる人々が海外にたくさんいることを、なんとか日本に伝えたく感じた経験でした。

ベトナムに限らずこの時の諸外国の対応は、各国でそれぞれの国や人々のために活動してきた諸先輩の残したものが、人々の中に生きていることの証の一つだったと思っています。

ODAの水分野でのプロジェクトでは上下水道設備のようなインフラ設備の整備を通じ、援助対象国の人々の生活を支え、国の発展に貢献しています。私達コントラクターとしては建設、引渡し後の設備がしっかり維持管理、運用されることがまず何より望むことです。完工から何年か後に、自身が関わった下水処理場を再訪問したことがあります。私が下水のプロセスから実際の設備機器の運転までを教えた客先の当時の新人スタッフが、自信にあふれて後進の指導をしているところを見た時、先に紹介した言葉の、「人に何かを残す」ことをわずかでもできたかと嬉しく感じました。

そして各プロジェクトは援助を受ける国側のみでなく、我々援助する国側の関係者にも、貴重なものを残

してくれたことを感じます。出会って同じ仕事をした国や人々のことを気にかけるようになり、再訪したり、ビジネスパートナーや友人としての付き合いが続いたり、相手国の方と結婚する人もいます。このような、プロジェクト事後調査書には表し難い、関わった双方の国の人々の内側に残る裨益効果は計り知れないものであると思います。

## 6. 最後 に

先日大学の学生さん向けに話をする機会があり、その中でテーマの一つとして「今後のグローバル人材とは？」という御題をいただきました。

その時には「これからは、たとえ国内でも他の国の社会や人との関わりが劇的に増え、社会のグローバル化は必然なので、仕事でも、家庭でも、地域でも、その時代に適応し、周りの人々と幸せに暮らせる人がグローバルな市民だと思います」という話をさせていただきました。

また海外での仕事、駐在、プロジェクト経験は、自分達の国や社会を外側から見るという貴重な経験を与えてくれます。

これから若い方々が海外へ積極的に踏み出し、多くの無形の財を様々な国の人達と共有できることを祈りながら、本稿を締めくくらせていただきます。